

# 持続可能な社会づくりのために

環境省 環境カウンセラー 出口 省 吾



ハチドリは中南米と北米に生息する体長10センチ程度の小さな鳥。

子どもの頃、明治生まれのおじいさんから「もったいない」といつも聞かされていました。

ぼくはこの言葉を聞いて不快な思いをしました。

「貧乏くさい」「ケチ」「はずかしい」…

大量生産・大量消費が美德の時代には「もったいない」という言葉は歓迎されませんでした。

でも、今「もったいない」は「MOTTAINAI」という世界共通語として広まろうとしています。

## 第5話 いま、わたしにできること

昨年度、次のようなお話（南米のアンデス地方に伝わる話）が話題になりました。

### 「ハチドリのひとしずく」～いま、わたしにできること～

森が燃えていました。森の生物たちは、われ先にと逃げていきました。

でも、クリキンディという名のハチドリだけは、行ったり来たり…

くちばしで水のしずくを一滴ずつ運んでは、火の上に落とされています。

動物たちがそれを見て「そんなことをしていったい何になるんだ」といって笑います。

クリキンディは、こう答えました。「私は、私にできることをしているだけです」

「燃える森」は地球温暖化、戦争、飢餓、貧困など深刻な問題に例えることができます。わたしたちはこのような環境や社会の大きな問題に対して、あまりにも巨大で複雑であるために、その解決に無力感を感じてしまいそうになります。でも、ハチドリはその心に勇気を与えてくれます。一人でも多くの人が現実を見つめ直して自分にできる具体的な行動を起こさなければ、決して事態は変わりません。このお話は静かなブームとなって、広がりつつあります。感銘を受けた人たちは、こんな社会だから大きなことはできないけれど、「いま、自分にできること」をやろうと、思い思いのことをそれぞれのやり方でこつこつと行動しています。地球環境のために「マイバッグを持つ」「ペットボトルの使い捨てをやめる」…こんな小さなことも「わたしにできるひとしずく」です。そして、共感した人が誰かに伝え、その人がまた他の人に伝えるというように、1人ひとりがハチドリとなり、そのひとしずくを少しずつ落としながら、この話は徐々にその輪を広げていっています。

地球環境問題に対する「わたしにできるひとしずく」は「もったいない」という考え方が基本です。日本語の「もったいない」という言葉は、3R【リデュース（ごみ減量）、リユース（再使用）、リサイクル（再循環）】をたった一言で表すことのできるすばらしい言葉だと、ノーベル平和賞受賞者であるケニアのワンガリ・マータイさんは絶賛し、この言葉を世界に広めようと「MOTTAINAI運動」をしています。この日本に伝わるすばらしい言葉をいつも心の奥底にもちながら「私にできるひとしずく」を実行し、それをみんなに広めていくことが持続可能な社会づくりに求められているのではないのでしょうか。

関北勢庁舎 生活環境課 T 72-3946 F 72-3748